

『保育原理』『教育原理』で、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」をどう教えるか －「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」を基本視座にして－

住本 克彦¹⁾＊

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2017年12月20日受理)

文部科学省は、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」(2017)において、2030年以降の社会の変化を見据えた課題解決に向けた教育政策の基本的な方針を示している。言うまでもなく、保育・教育の施策の現況と課題について取り扱う大学教職課程科目は『保育原理』『教育原理』である。本稿では、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」を基本視座に、大学教職課程『保育原理』『教育原理』で、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」(「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標)をどう教えるかについて概観する。

(キーワード) 保育原理、教育原理、生き抜く力、レジリエンス、グリット、アクティブ・ラーニング

I はじめに

大学の教職課程科目である『保育原理』『教育原理』において、教育の目指すべき姿やそのための手立てを明確に理解させることは肝要である。本稿では、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」(文部科学省)を基本視座に、大学教職課程『保育原理』『教育原理』で、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」(「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標)をどう教えるかについて概観したい。

なお、「生き抜く力」の定義については、平成20年3月告示の学習指導要領においてまず、「生きる力」が使われ、「知・徳・体のバランスのとれた力」を「生きる力」とした(文部科学省、平成20年度文部科学白書、2010)。そして、「第2期教育振興基本計画」における「基本的方向性1：社会を生き抜く力の育成」で、「生きる力」と同義で使用している(文部科学省)。本稿においても、同義で使いたい。

II 「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」

文部科学省は、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」(2017)において、2030年以降の社会の変化を見据えた課題解決に向けた教育政策の基本的な方針を示している。その中で、「今後の教育政策に関する基本的な方針」として、第1に「夢と自信を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する」を挙げている。ここでは、「急激に変化する社会を『生き抜く力』が必要で

あるとし、「夢や目標を持って積極的に行動し、積極的に社会に参画していくための力を育成し、自信を持って可能性に挑戦することができるようにすることが重要である」としている。また、この度の「第3期教育振興基本計画」の考え方も、今までの理念を踏まえたものとしており、つまり「第2期教育振興基本計画」(平成25年度～平成29年度：現行基本計画)の中核となった「社会を生き抜く力の養成―多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力―」を育むことの重要性も明記しているのである。

ここでは、幼稚園から高校まで、「生きる力」の確実な育成をポイントとし、幼稚園から生涯にわたる学習の基盤となる「自ら学び、考え、行動する力」を確実に育てることを明記している。さらに、大学における学修では、課題探求能力の修得を最重要とし、課題発見・解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ学修、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の導入展開を推奨している。

中央教育審議会のいわゆる「質的転換答申」においても、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的な能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を

＊連絡先：住本克彦 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。」(中央教育審議会 答申、2014)とし、学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、未知の課題に挑戦しようとする気概を持つのであり、生涯学び続ける力を修得できるのである。

教員と学生が双方向で意思疎通を図りつつ、教員と学生が一緒になって、相互に学び合える場を設定し、学生が主体的・能動的に課題を発見し、それに挑み、解答を見出していく能動的学修への転換の重要性を示したのである。つまり、この「質的転換答申」によって、大学が、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業への転換を図る方向性を明示したのである。

いずれにしても、次期「第3期教育振興基本計画」においても、現行の「第2期 教育振興基本計画」においても、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」のためには「教員の資質能力向上」、「幼児教育の向上」は最も肝要であるとしている。

Ⅲ 『保育原理』『教育原理』で、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」をどう教えるか

以上見てきたように、急激に変化する時代を生き抜くためには、知識だけではなく、学ぶことと社会とのつながりを意識した、知に徳と体を加えた教育を充実しなければならない。そして、そうした知・徳・体のバランスのとれた「生き抜く力」を育むためには、知の質や量だけではなく、学びの質や深まりを重視する必要がある、そのための教育方法として、主体的・協働的に学ぶ学修、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の導入展開を推奨しているのである。

次期学習指導要領においては、「育成すべき資質・能力」として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力 人間性等」の3つを上げている。田村(2016)は、「アクティブ・ラーニングで目指す『対話的な学び』とは何か」のインタビューの中で、「これらの育ちを実現するために、『主体的な学び』『対話的な学び』『深い学び』が行われることが必要」であるとし、「三つの視点からより、一体的となる学びの実現をイメージして」行くことが大切であるとしている。特に、『深い学び』については、各科目等で、その科目なりの「見方」「考え方」を学ぶだけではなく、学生が、将来未知の課題に直面した時、今まで学んできた見方・考え方を使って、自分なりに課題解決するところまで高めるような学習の在り方を指すのである。つまり、学生は、グループワークや全体発表での『主体的な学び』(自ら課題設定等)、『対話的な学び』(グループや全体での話し合い活動等)を通して、『深い学び』を体得していくのである。

教育の目指すべき姿やそのための手立て等の理解を目標とする『保育原理』や『教育原理』においては、「アクティブ・ラーニング」を実践しながら、つまり、主体的・対話的で深い学びの中で、その働きを通して、個人並びに社会のより良い現在と未来を実現しようとする教育の未来指向性をこそ、将来の保育者、教育者に自覚させなければならないのである。

将来の保育者、教育者が個人並びに社会のより良い現在と未来を実現しようとする教育の未来指向性を持たずして、子ども達に「生き抜く力」を育てることはできないのである。

例えば、保護者から、「子どもが怪我をしないように、外遊びは控えてほしい」との旨の訴えがあった場合を想定しよう。子育て支援では、もちろん共感的理解をベースにした受容は大切ではあるが、最も大切なのは、保育者、教育者としての教育の目的に関しての明確な理解や自覚なのである。

さらにそういった保育者、教育者を養成するために、これからの社会で求められる人材像を踏まえた保育・教育の展開が重要である。これからの社会で求められる人材像を踏まえた上で保育・学校現場の様々な課題への対応を図るためには、社会からの尊敬・信頼を受ける保育者、教育者、思考力・判断力・表現力等を育成する実践的指導力を有する保育者、教育者、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する保育者、教育者になろうとする心構えを持たせる教育こそ重要なのである。そしてこれらの資質を有した保育者、教育者を育成するには、アクティブ・ラーニングを活用した『保育原理』や『教育原理』における授業実践を通してこそより一層可能となるのである。自ら主体的に学ぶ意欲を向上させるアクティブ・ラーニングの理念は、急激に変化する時代を生き抜く力を育成し、他者との協同学習によってコミュニケーション能力はもちろん、チーム全員で課題解決に向かう姿勢は、共生社会のあるべき姿そのものであるとも言えよう。

Ⅳ 「生き抜く力」と「レジリエンス」(Resilience)、「グリット」(Grit)

小玉(2014)は、レジリエンスを「①現実的な計画立案実行できる力 ②自分を肯定的に捉え、自分の強みや能力を信頼できる力 ③コミュニケーション力と問題解決力 ④強い感情や衝動をコントロールできる力」としている。また、レジリエンスを高める6つのキーワードとして、「①冷静さ(感情のコントロール) ②柔軟性(多様な思考) ③楽観性(ポジティブ思考) ④自信力(自己効力感) ⑤人間力(人間関係力) ⑥回復力(自ら癒す力)」を挙げている。

さらに、レジリエンスに含まれるグリットについて

Angela.D (2016) は、グリットを「やり抜く力」とし、それを強くするステップとして、「①興味（心から楽しむこと） ②練習（慢心しないこと） ③目的（社会に貢献すること） ④希望（常に持ち続けるもの）」の4ステップを重視している。

大学教育の現況においては、専門知識の探究から知識基盤社会をたくましく生き抜いていくための汎用的技能の（コミュニケーション能力・粘り強さ・自ら課題を発見し、解決を図る力、自ら目標を立て行動する力・変化や未知の問題への対応力・協調性・論理的思考力など）習得に焦点が移っており、これら、レジリエンス、グリットも「生き抜く力」の重要な要素であり、今後、保育・教育で最重視していくべき、思考力を中核とし、基礎力と実践力を要素とした「21世紀型能力」（国立教育政策研究所、2013）が目指す「生きる力」とも重なるのである。

この点では、上島（2016）は、「困難を乗り越える心の力：レジリエンスを身につけよう」として、56のワークを紹介しており、『保育原理』『教育原理』等の授業の中でもこういったグループワーク実施が可能である。また、鈴木（2016）は、子どもの「生き抜く力」の高め方として、「幼児期のスポーツ教育が重要」とし、成功体験の積み重ね等の大切さを明記している。

徳永（2017）も、レジリエンスの定義が拡大してきたとして、「過酷な出来事や高いリスクへの対応という視点のみならず、全ての人にとっての個人の有能さや強みを重視する視点」へと変化してきたと分析している。そして、子どもを育てる母親の養育レジリエンスの要素に、「①子どもに関する知識を豊富に持っていること ②社会的に十分な支援を受けていること ③育児を行うことを肯定的に捉えていること」の3点を挙げ、母親がしなやかに子育てに取り組むためには、母親の力だけではなく、周囲の支援の大切さを強調している。

この点では、蝦名（2016）は、周囲のサポート要素を5点挙げている。「①実質的なサポート ②情報提供のサポート ③いやしのサポート ④心の居場所の提供 ⑤決断や行動のサポート」の5点である。

さらに、梶田（2008）は、「自己を生きるという意識」において、「我的世界」と「我々の世界」両方の世界を生きる力の重要性を説いており、これは、「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」の「教育の目指すべき姿」（【個人】：自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を想像する人材の育成 【社会】：①一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現 ②社会<地域・国・世界>の持続的な成長・発展）とまさに合致している。

すなわち、梶田（2008）が言う、自分自身が「本当に生きている」実感を持った「当事者として生きる」、つまり、「我的世界」を土台として「我々の世界」をしっかり生き

抜く力を育てていくことが大切なのである。この点では、國分（2004）が提唱する「構成的グループエンカウンター」のキーワードである「教師自身の自己開示」（人生の先輩としての「生きること」等についての自己開示）が、将来の保育者、教育者を目指す学生への指導のポイントになるであろう。

V おわりに

上記を踏まえると、これからの保育者、教育者に求められる資質能力は以下のように整理される。これらは、特に大学教職課程科目の『保育原理』や『教育原理』の中で取り上げ、これからの「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」を意識しながら教育実践を進められる保育者、教育者を育てていかなければならない。

(1) 教職に対する責任感や探究力、教職生活全体を通じて自ら学び続ける力を持った人物。すなわち、「学び続ける者こそ、教える資格を持つ」をしっかりと認識した人物のことである。

(2) 保育、教育の専門職としての専門的知識や技能を持った人物。すなわち、急激に変化する社会に柔軟に対応できる人物のことである。

(3) 今後より一層求められるであろう教職に関する高度な専門的知識、グローバル化や情報化、特別支援教育等に関する専門的知識を持った人物。特に、教育の情報化の目指すものとして、情報や情報手段を主体的に選択・活用していくための情報活用能力を持った人物を育成することである。

(4) 豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、チーム対応力、地域社会と連携・協働できる力等、総合的人間力を持った人物。特にこの総合的な人間力については、一層求められるであろう。

(5) 専門知識の探究から知識基盤社会をたくましく生き抜いていくための汎用的技能の中核にあるものとしての、自尊感情を常に実感できる人物。この自尊感情の育成については、①自己効力感 ②自己有能感 ③自己有用感以上3つをその要素としており、「生き抜く力」や「レジリエンス」の大切な構成要素でもある（表1参照）。

社会の現況をみると、グローバル化や情報化など、急激な変化に伴い、高度化し、複雑化する諸課題への解決力が一層必要となっており、幼児教育・学校教育において、求められる人物像の認識が何より必要とされる。

文献

- 1) 中央教育審議会 答申：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－、9、2014。

- 2) アンジェラ・ダックワース著、神崎朗子：「GRIT『やり抜く力』」ダイヤモンド社 2016
- 3) 蝦名玲子：「『生き抜く力』の育て方」大修館書店 2016
- 4) 梶田叡一：「自己を生きるという意識」金子書房 2008
- 5) 梶田叡一・住本克彦：子どもたちが輝くクラスづくりのための総合質問紙『i-check』，東京書籍，2016.
- 6) 小玉正博：「レジリエンス思考」河出書房新書 2014
- 7) 國分康孝・國分久子：「構成的グループエンカウンター事典」図書文化社 2004
- 8) 国立教育政策研究所：教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則 pp26-30 2013
- 9) 文部科学省：「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」2017
- 10) 文部科学省：「第2期教育振興基本計画」2013
- 11) 住本克彦：「大学におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開への試み－『保育原理』の授業実践を通して進める『主体的・対話的で深い学び』－」新見公立大学研究紀要 第37巻 2016
- 12) 住本克彦：「アクティブ・ラーニングの理論と実際」『新しい視点から見た教職入門』大学教育出版 2017
- 13) 住本克彦：「高陽中ブロック授業研究『自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る効果的取組』－児童・生徒に「役割」「期待」「承認」を－」『新しい視点から見た教職入門』友野印刷（株）2015
- 14) 鈴木威：「子どもの『生き抜く力』の高め方」東邦出版2016
- 15) 田村学：対話的な学びとは何か、月刊教職研修、9、20-23、2016.
- 16) 徳永豊：「子どもの育ちと環境、レジリエンス」『教育と医学』vol.773 pp4-10 慶応義塾大学出版会 2017,11
- 17) 上島博：「イラスト版子どものレジリエンス」合同出版2016

『保育原理』『教育原理』で、「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」をどう教えるか

表 1 自尊感情の要素とその育成

	自己効力感	自己有能感	自己有用感
定 義	自分はその行いをやり遂げることができるという感覚。未来指向性。明日を信じる力。自分を信じる力。夢。目標。	自分ではできるという感覚。 自己への信頼性。 自信と充実感。	他者・社会に対して役立つことがあるという感覚。他者との関係性。集団への貢献性。集団への貢献（役に立つ）
子ども の意識	「できそうだ」 「やればできる」	「がんばってよかった」「〇〇ができるんだ」	「このクラスの一人でもよかった」 「皆の役に立ってよかった」
授業等、 教育する 際の視点	●期待 人も自分も励ます。やる気・意欲を高める期待。	●承認 ふり返る。自己評価。他者評価。認められる喜び。	●役割 自分で決めた役割を担う。 自己決定（自己責任を伴う）。

(住本, 2015)

